

無痛分娩の合併症とそれに対する対応について

低血圧:無痛分娩で用いる麻酔では低血圧(血圧が低くなる)が起こりやすくなるため、必ず事前に点滴を取らせていただき、必要に応じて輸液を調節することで影響を少なくしています。必要時使用できるように昇圧薬(血圧を上げるお薬)が分娩室に用意されており、無痛分娩中は定期的に血圧などのモニターを行っています。特に仰向けになった際に起きやすいため、動悸がしたり気持ち悪くなった場合にはすぐに近くのスタッフにお伝えください。

足の痺れや動かしにくさ:無痛分娩を行っている間はお産の痛みに関わる神経だけでなく、近くにある足の感覚や運動を伝えている神経にも麻酔の影響が生じ、足の痺れや動かしにくさがしばしば起きます。お薬の広がり方によって症状の強さは様々ですが、お産が終了して局所麻酔薬の投与を終了すると、数時間から半日程度で効果がなくなり回復します。このため無痛分娩中は転倒の危険性があり、原則として分娩台(お産のためのベッド)の上で過ごして頂き、適宜カテーテルで導尿を行います(麻酔が効いているのでこの処置の不快感も少なくなります)。

硬膜穿刺後頭痛(PDPH):硬膜外カテーテルを挿入するための処置の際に、硬膜に穴が空いてしまい、中の髄液が漏れ出すことにより頭痛が生じることがあります。無痛分娩では0.8%程度の発生率とされ、起き上がっている時に起きやすく横になると改善する頭痛、吐き気や首のこわばりなどが生じます。通常は処置後72時間以内に症状が出て、1週間程度で改善することが多く、安静にしたり頭痛に対してのお薬を使用して対応します。改善が見られなかったり症状が強い場合にはご自身の血液を硬膜外腔に入れて穴を塞ぐ硬膜外血液パッチと呼ばれる治療を行うことがあります。頭痛自体はお産や他の多くの原因で起きるため、他の原因についても調べながら対応を行います。

針を刺した部分の痛み:硬膜外麻酔では表面の局所麻酔を行った上でカテーテルを通せる太さの針を使用しています。そのため針を刺した部分は数日間お痛みが残ることがありますが、長期的な影響はないと考えられています。いわゆる腰痛は妊娠やお産に伴う影響が大きく、無痛分娩を行うことで増えることはありません。

嘔気(気持ち悪さ)、かゆみ、発熱、シバリング(震え)、尿閉(尿が出しにくくなる)などは無痛分娩の影響で麻酔を用いない分娩より起きやすくなる可能性があります。症状の強さに応じてお薬を使用したりカテーテルで尿を出したりする処置を行います。

神経障害:分娩にかかる時間が長くなり、赤ちゃんの頭で押されたり分娩のための体位を取

る時間が長くなることにより、産後に排尿障害や痺れ、感覚障害、力の入りにくさなどの症状が無痛分娩を行っていない方より起こりやすくなる可能性があります。無痛分娩の処置による直接的な神経損傷はまれで、多くはカテーテルを入れる処置の際にはっきりとした症状が起きて続きます。一時的な痺れや響く感覚はカテーテルを進める際に時々生じ、位置の調節などで対応します。

稀ですが重篤になりうる合併症としては局所麻酔薬中毒、高位脊髄くも膜下麻酔、硬膜外血腫・膿瘍、アナフィラキシーがあり、予防や早期発見が可能なものについては安全のための対策を行なっています。

局所麻酔薬中毒:無痛分娩では十分な範囲に痛み止めを広げるため、薄い濃度の局所麻酔薬を多く使用します。通常ゆっくりと吸収されるため局所麻酔薬による全身への影響はほとんど見られません。硬膜外カテーテルが意図せず静脈に入っている状態で濃い濃度の局所麻酔薬を大量に投与すると局所麻酔中毒と呼ばれる全身への影響が生じ、心停止を含む重篤な合併症が起きることがあります。当院では予防のために試験投与、薄い濃度の局所麻酔薬の使用、一度に大量に入らないように分割での投与、持続的なモニタリングを行っています。

高位脊髄くも膜下麻酔:硬膜外に投与する量の局所麻酔薬が硬膜外ではなく、脊髄に直接効果が生じるくも膜下へ投与されると下半身だけではなく全身に早く強く効果が出てしまい、低血圧、徐脈、呼吸困難、意識障害などの合併症が生じる可能性があります。この場合には麻酔科医が全身麻酔の際に行う処置と同様に、一時的に眠っていただき、呼吸のための管を喉に入れ(挿管)、呼吸のお手伝いを行い(人工呼吸)、血圧を保つための処置を行います。局所麻酔薬による一時的な効果のため、時間が経って効果が切れてきたところで処置も順次減らしていくこととなります。

硬膜外血腫・膿瘍:脊髄の近くまで針を刺すため出血や感染が起こり、神経を圧迫することで麻痺を起こす可能性はゼロではありませんが、一般には数万分の1から十数万分の1と極めて稀な合併症です。血液が固まりにくくなるようなお薬(抗血小板薬・抗凝固薬、妊娠関連ではヘパリン、アスピリン、EPAなど)を使われている、あるいは1週間以内まで使用していたり、特殊なお病気をお持ちの場合は必ず担当医に申し出てください。

アナフィラキシー:局所麻酔薬に対する真のアレルギー反応は一般に稀で、無痛分娩や産科関連の麻酔ではその中でも比較的アレルギー反応を起こしにくいとされるアミド型の局所麻酔薬を使用しています。